
俺がF a t eの世界に転生するはずがない

眠れる英雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺がFateの世界に転生するはずがない

【Nコード】

N4628X

【作者名】

眠れる英雄

【あらすじ】

ひよんなことで死んでしまい、テンプレなテンプレをしてしまった俺。しかし、転生先はFateの世界！？ ヤバい、死ぬますッ！？ 更に神様から貰った能力も微妙＋制限がかり、さあ大変！
果たして俺は死亡フラグを回避することが出来るのか！？

転生？ テンプレですな（前書き）

すみません、作者です。

こんな未熟者ですが、今度こそは頑張っていきたいので応援してください。

転生？ テンプレですな

——赤い何か飛び散る。視界が赤く染まる。

身体に力が入らない。指一本動かすことすら出来ない。

「……………ゴフツ」

口から何か溢れる。それは、自分の身体についている何かと同じ色をしていた。

(……………ああ、血か……………)

ボンヤリと、それを他人事のように見詰める。

自分の身体が自分のものではない感じだ。もう、全身の感覚が存在しない。

『——ッ！！ ——ッ！！』

目の前に見える少女が何かを叫んでいる。涙を流しながら、自分の血で染まった手で、必死に自分の身体をゆさぶっている。

——けど、聞こえない。何も、聞こえない。

意識が反転していく。思考が停止していく。

そんな夢心地の意識の中で、ふと思った。

「……ああ、よかった……」

無事で、本当によかった。

薄れていく意識の中で、真っ黒に染まっていく視界から見える少女を見て、そう、心から思えた。

そして……俺は、二度と目の覚ますことのない、深い眠りについた

――

はずだった。

「――っと言うわけで、君には転生してもらうね？」

「……マジでテンプレかよ……」

俺は目の前にいる少女の話を聞き終えると、大きなため息を吐いた。

俺の名前は零^{レイ}。何処にでもいるような、ごく普通の高校生だった。

だった、というのは俺が死んでしまったからだ。いや、これがマジで。

死んでしまった俺は何故かまだ意識があって、気付くとこの真っ白な部屋にいて、目の前に一人の少女がいた。

「いやー、しかしあれだよな？　トラックに轢かれそうな女の子を見て、助けようとして自分が轢かれるなんて……どんなテンプレだよな？」

「……少し、黙ろうか」

「ぎゃー……ッ!?　あ、頭が割れちゃう！　わかった、悪かったからヘッドロックは止めて……ッ!?」

そう泣き叫んで頭を掴む俺の腕を離させようとしているこの少女がこの事件の原因。

本人言わく――彼女は、神様と呼ばれる類いの存在らしい。

……うん、最初そう言われた時は正気を疑ったよ。「……………」は？」と三十秒近く硬直しちまった。

まあそのあと、色々とごちゃごちゃな話をして、その話をまとめる
と――

・どうやら俺は死んだらしい

・その時ちょうど神様も暇で、何か暇潰しはないかなーと探している所、俺の魂を発見

・「そうだ！ 今流行りの転生をさせてみようッ！」

・俺の魂を回収

・「――と言うわけで、君には転生してもらおうね？」

――と、言う感じだ。

……それでいいのか神様。かなり適当じゃね？

「うう……僕、神様だよ？ こんなことして、バチが当たるよ……！
……ってそういうば、君もう死んでるんだよね……」

すると、いつの間に抜け出したのか。俺の掌から離れた神様は痛そうにそこを擦りながら、俺を睨んできた。

……見た目が少女だから、小動物が見詰めてくるにしか見えないん

だが？

「……んで？ 俺はどの世界に転生するんだ？」

いつまでも睨まれるわけにはいけないので、強引に話を変える。すると、神様……ああもうめんどくさいなッ！！ 神はまだ怒っているらしく、

「ふん！ 君なんてバイオハザードの世界に……！」

「ちょっと待てやこら」

ガシッ、と彼女の肩を掴む。ふざけるな、何で転生先がゾンビワールド何だよ！？ そんなのすぐ死んじゃうだろ！？

「チッ……冗談だよ冗談。本気にしないの」

そう言ってニコリと笑う神。……その前に舌打ちしたことを俺は忘れることはないだろう。

「君の行く世界は都合上説明できないけど、特別に君には能力をプレゼントするよッ！！」

「おお！！ 何かそれっぽくなってきたッ！！」

まさか本当に能力が貰えるなんてどんだけテンプレなんだ？ ま、とりあえず俺の欲しい能力は……

「んー？ じゃあさ、『直死の魔眼』って貰えるか？」

「……一応聞くけど、どうしてそれを選んだの？」

欲しい能力を言ったらジト目で睨まれた。え？ 理由？ それはもちろん――

「『……生きているのなら、神様だって殺してみせるッ！』」

ネタに走りたかったからです、はい。

「目の前で殺人予告ッ！？ そんなの駄目に決まってるじゃない！？」

「なん……だと……？」

そ、そんなッ！？ 『直死の魔眼』が手に入らないなんて……

「神は死んだッ！」

「目の前にいるよッ！？」

そう言って俺の言葉に鋭いツツコミを入れる神。……うん、もう十分だな。

「さて、冗談はさておき……」

「あれ？ 今までの冗談だったの！？」

いや、気付けよ。そのくらい、あんた神様だろ。

「まあとりあえず、無難に『無から有を作り出す力』とか、『全て

を完璧にこなす力』とかくれよ」

「……………あー、えっと、その……………」

……………ん？　　いったいどうしたんだ？

俺が願い事を言った次の瞬間、急に神はオドオドとなって、周りに視線を動かし始めた。

そうやって何度も悩み、口を開こうとして閉じたりして、数分たつてようやく覚悟を決め、

「実は……………そういう願い事、無理なんだよね♪」

……………

……………

……………

……………はい？

「えっと……………確か、能力をくれるんだよね？」

「うん、そうだよ？」

「じゃあさ、さっき願った能力は？」

「無理♪」

「何でッ!？」

は？ え？ どういうこと？ 願い事を叶えてくれるんじゃないのか!？

「いや、ねー。実は僕が叶えられるのは僕が持つてる能力だけでね。そんなもの、持ってないからね。だから無理なんだよね？」

あはは、と悪いと思っっているらしく悲しげな乾いた声が響く。

……ったく、そんな顔されたら怒るにも怒れねえだろうが。

「……で？ 俺の能力はどうなるんだ？ もしかして無しで転生するのか？」

「ううん、それはないよ。だから君には、この中から選んでもらうよ」

神はスッと空へ手を上げると、呟いた。

「――■●ΘΣΩ■●ΦΦ■ζεδγ■●†χωψッ!」

それは俺には、人間には理解することが出来ない言語。誰だろうか？ 昔、誰か偉い人が言っていた言葉。

『言葉には、意味がある』

今ならわかる、その意味を。その文字に込められた、絶対的威圧感を。

これが……神の奇跡……!!

神の声はその空間に響いた次の瞬間――

――視界を埋め尽くすほどの大量の紙が、俺を囲むよう螺旋状に舞い降りた。

「な……ッ!？」

そんな神々しい光景に思わず息を飲む。

凄い。これが、これが……神の力。

「――これがいま僕が持つてる能力の全てだよ。さあ、選びなよ。この中から君の、君だけの能力を」

そのあり得ない光景の中心で、彼女――神は、薄く微笑む。見守るように、母のように優しい笑みを浮かべながら。

……この中から？　こんな、無限にもありそうな中から？

選ぶのを躊躇する。怖い、恐怖する。もしも、IFを連想させる。

どれだ？　どれを選ばいいんだ――？

「……怖いのかい？　選ぶことが」

そうやって躊躇していると、後ろから神の声が聞こえた。その声は優しく、負の感情を洗い流していくような気がした。

「だったら選らばなければいいじゃないか。君がこれだと思ったものの、無意識で選んだものが、君に一番近いはずなんだから」

……そうじゃねえか。何を悩んでんだ、俺は。

俺は螺旋状に渦巻く紙たちに近づき、手を伸ばす。

……所詮、能力だろ。そんなものがなくても、人は生きていける。なら、どうにでもなりやがれ――！

手が、腕が、無限と呼べる紙の渦に吞み込まれる。しかし、紙が俺の腕に当たる感覚がしない。まるで、紙が意思を持っているように。まるで、何かを待っているように。

そして……

――確かに感じる、何かを掴む感覚。

「これ……だあッ!!」

俺はそれを握り締め、一気に紙の渦から腕を引き抜く。

そこに書かれていたのは――！

『直死の魔眼（不完全）』

『刃物を操る力（ナイフ、日本刀のみ）』

『身体能力上昇（歳）』

………はい？ 何だこれ？

書かれていたのは三個の能力だった。……いや、これを能力と言っているのだろうか？

「へー？ どれどれ……うわぁ、よりによってそれらを引くなんて……」

書かれていることが気になったのだろうか？ 神は俺の横に來ると能力が書かれた紙を見て、顔をしかめている。

え、何？ そんなにヤバいのこれ？

「えっと、まず始めに『直死の魔眼（不完全）』のことだけど……」

それ、使い過ぎると死ぬよ？」

「……………え？」

は？ 何それ怖い。

「いやーねー、その完全版ならいくら使っても大丈夫なんだけど……それ、不完全でね。あまり使い過ぎると脳が処理できず血管が千切れたり、脳がパンクしたり、挙げ句のはてには目が失明するかも知れないよ？」

……………。

もはや言葉が出なかった。え、何？ 嫌われてんの？ 俺神様から嫌われてんのかな？ ……って目の前に神様いるし。

「えっと、まだ続きがあるんだけど……いい？」

「…………もう、好きにしてくれ……」

「ハハハ…………えっとね、次に『刃物を操る力（ナイフ、日本刀のみ）』だけど…………うわぁ、また変なのを引いて…………まあこれは簡単に言うと、君はナイフと日本刀なら変幻自在に操れるようになる能力だよ。それ以外は駄目だけどね」

「……………」

え？ 何これ？ 泣いてもいいよね？ 何で俺の能力は全部制限がかかってんだよ！？ ……いや、そういえばまだ後一つ残ってる！ それにかければ…………！

「最後のだけ……『身体能力上昇（歳）』……………うん、これは本当に微妙なやつを引いたね。これは簡単に言えば、その歳で動ける領域まで身体能力を上げることが出来るやつだね。ちなみに、これが身体能力上昇の最下位に位置する能力だよ」

「神は死んだッ!!」

何故!? 何で!? 何なんですか!?

あまりの運の無さに涙が出そうになる。ちくしょう、俺が何をしたい!?

「えっと……どんまい?」

「止めて! そういう同情が一番胸にくるから!!」

ほんと、グサツとくる。精神的ダメージなら9999ダメージは越えてると思う。

「うーん、こんだけ可哀想だと……よし、決めた! 君は特別に転生した後も僕が面倒みてあげるよ」

「え、マジで!?」

ショックを受けていると、唐突に神がそんなことを言い始めた。確かに、それは嬉しい誤算だった。神がいれば、大抵のことはなんとかなるッ!

「ところでさ……君、猫好き?」

「……？ 好きだけど何で？」

「ううんッ！ 何でもない、何でもないよッ！？」

ブンブンと首を横に振る神。……その動作が可愛いと思ったのは内緒だ。

「と、とりあえず全ての下準備は終わったよ。さあ、君の冒険はこれから始まるんだ。悔いは無い？ OK、じゃあ良い旅をッ！！」

そう、神が叫んだ次の瞬間――

『カパッ』

「……『カパッ』……？」

何かが開く音がして、足下から感覚がなくなる。そう、まるで宙を浮いているような――

「うわああああああああああッ！？」

そこまでが思考の限界だった。次の瞬間、突如穴が開いて、その上にたっていた俺は重力に逆らえず意識を失うように落ちていった。

『……あ！ しまった、エラーが……ッ！？』

……最後に聞こえた声が、何故か俺には凄く不安に感じた。

転生？ テンプレですな（後書き）

……あれ？ 何だか前より分かりにくくなっているような……？

……え？　ここ何処？（前書き）

久しぶりの投稿です。

……やっぱり、ここからスタートになってしまおうか……。

では、本編スタートッ！！

……え？　ここ何処？

——意識が浮上する。感覚が戻ってくる。

恐らく転生したのだろうか？　身体に少し違和感を感じながらも、確かな生を実感する。

目の前は真っ暗。……当然だ。だって目を瞑っているのだから。

眼を開いた瞬間、それが二度目の人生で最初に見る景色だ。俺はそれを、心に刻むだろう。

俺はおそろおそろ眼を開いく。その景色に、たくさんの希望を抱いて——

——そこは、地獄だった——

「……………え？」

それが何なのか、最初見た瞬間理解出来なかった。目を取り入れた情報を、脳が否定しているようだった。

——人が、生き物が、死んでいく——

——建物が、居場所が、崩れていく——

——炎が全てを、地獄の業火が全てを焼き尽くす——

「何だよこれ……ッ!!」

声が、震える。身体が、震える。心が、壊れていく。

何だ、何なんだこれは。いったいどうなってんだよッ!?

「……う……」

「ッ!! お、おい! 大丈夫か!？」

呆然としていると、目の前で亡霊のような足取りだった少年が力尽きるように倒れた。

声をかけたり揺さぶってみるが、ほとんど反応がない。

「おい! ……クソ、死ぬんじゃないぞ!!」

俺は倒れた赤毛の少年を起き上がらせ、肩に腕を回し引きずるように歩き出す。

「……………」

赤毛の少年はまるで死んでいるようにピクリとも動かず、諦めたように死んだ眼で途方を見詰めていた。

「って何で俺縮んでんのッ!？」

そう、どういうわけか俺の身体は高校生であった時に比べ、だいぶ縮んでしまっていた。身長はだいたい横の赤毛の少年と同じくらい。おかげで運ぶのに凄く苦勞する。

あのくそ神……ッ!! 何が神様だ! いきなりがこれってどういうわけだよ!!

「誰か、誰かいらないのか………!!」

辺りを見回す。しかしそこに人はおらず、あるのは死体だけ。生き物は全て死んでいた。

すると――

「待って……そのアナタ……」

――声が、瓦礫の下から聞こえてきた。

「ッ!! おい大丈夫かアン……!!」

声が、止まる。息が、止まる。そこにいたのは一人の女性とその人の赤ん坊。しかし、その女性の足は――

「お願い……この子を……私はもう……だからこの子だけでも……」

——瓦礫に潰れて、存在しなかった——

「……くそ！ 諦めんなッ！！ 今人を呼んでくるから……ッ！！」

一瞬。まさに刹那。俺が人を呼んでこようと眼を離した次の瞬間……

——”ズドオオンッ！！”

突如降ってきた瓦礫が、ちょうど彼女たちの元に落ちてしまった。

当然、彼女たちは——

「……………ッ！！ くそ！ ちくしょう！」

もう一度眼を開くと、そこにあったのは大量の瓦礫と真っ赤に散った血。その量は明らかに致死量を越えていた。

俺があの時、躊躇しなければ……ッ！！

胸に後悔を抱き、俺はもう一度歩き出した。腕に力がこもる。せめて、コイツだけでも……！

「絶対、死ぬんじゃないぞ……！！」

俺は赤毛の少年を背負いながら、先の見えない地獄へと歩き出したのだった……………。

???
Side

——気が付けば、焼け野原にいた。

人が燃えている。人が溶けている。人が壊れている。人が潰れている。

歩けば歩くほど、人は無惨な死に方をしていた。

——助けて、助けてくれッ!!——

——死にたくない、死にたくないよ……!!——

——痛い、痛いよう……!!——

声が、聞こえる。叫びが、自分に向けられる。

当然だ。今ここで動いているのは自分だけ。皆が、自分に助けを求める。

助けて、救ってくれ、と。

――けど、自分には助けられない。自分には、救うことが出来ない。

だから無視した。耳を塞ぎ、目を瞑り、ただ前へ進み続けた。助かるために、自分が生き残るために、死にゆく命を見捨てた。

振り返ることなど許されない。それは、己れの罪なのだから。

空が焼けている。

家が熔けている。

人は潰れている。

路は途絶みちえている。

……いったいどれだけ歩いただろうか？　もう前へ進んでいるのか、後ろに戻っているのか分からない。

クラッと、一瞬身体の感覚が鈍る。身体に力が入らず、膝が地に付いて、何の抵抗も出来ずに倒れた。

『……………ッ！……………ッ！！』

……声が、聞こえた気がした。けれどそれは幻覚なのだろう。もしもそれが本当だとしても、自分を助けてくれるはずがない。今まで見捨ててきた、自分のことなんか。

身体に力が入らない。手足が冷えていく。視界が少しずつ闇へと染まっていく。

ああ、これが……死か。

そんなことを思いながら、諦めたように目を瞑り――

――ふと感じる、誰かの暖かさ。

(……………え？)

突然のことに驚き、閉じていた瞳が開く。そこには、自分と同じぐらいの少年が必死に自分のことを背負いながら歩いていた。

(……………なんで？)

疑問が消えない。どうしてだと思う。こんな地獄を見たのに、誰かのことなど考えていたら自分まで死んでしまう状況で、どうしてこの少年は自分のことなど助けようとするのだろうか？

少年は辛そうに顔を歪ませ、歯を食い縛り、口を開いた。……それは、まるで己れ自身に誓っているように見えた。

『……絶対、死ぬんじゃないぞ……！』

その姿は、死に抗い、それでも人を助けようとするその姿は、自分にとって――

――『正義の味方』に、見えたんだ――

S i d e e n d

「はぁ……はぁ……はぁ……」

いったい、どれだけ歩いたのだろうか？ もう、それすら分からない。

歩けば歩くほど、たくさんの人が死んでいた。手を伸ばしても、助けようとしても、後一步足りない。

みんな、俺とこの少年を除いて死んでしまった。

だから進み続けた。せめてコイツだけでも、この少年だけでも助け出すために。

……けど、いくら進んでも、いくら叫んでも、安全な所なんて存在しなかった。

「はぁ……はぁ……はぁ……グウ……！」

ついに、限界がきた。

ヨロヨロと、まるで生まれたての子羊のように震える足が動かず、そのまま前へ倒れた。

転けたんじゃない。現に足は震えて動かないし、息をすること事態苦しい。

もう、立つのすら限界だった。

「……………ここまでかな……………」

（まったく、転生した直後に死亡かよ…………）

そんなことを思いながら、俺は薄れていく視界の中であの赤毛の少年を見詰めた。

「……神様、俺はここまでいい。だからせめて、コイツぐらい救ってやってくれよ……」

この際どんな神様だろうと関係ない。あの駄目神でもOKだから、頼む。

俺はその時、生まれたて初めて心の底からそう願った。それだけを祈り続けた。

そして――

”ガサッ”

『……ッ！！　この子たち……まだ、生きている……ッ！！』

その願いは――叶った。

もはやボヤけてしか見えない視界の中で、誰かが赤毛の少年を見ている。

……何故か俺には、涙を流しているような気配を感じた。

分からない、この人が誰なのか。顔も見ることが出来ない。けど、これだけは言えた。

俺は震える手を伸ばし、必死にその人のコートの裾を掴んだ。その人がこっちを見てるのか、何か言っているのかすら分からない。

何も見えない。何も聞こえない。それでも――

「……………この子を……………助……………けて……………」

――この人なら、大丈夫だと思えたんだ……………。

それを告げた次の瞬間、俺は引き取られるように意識を失った――

……………ふと、真っ黒な暗闇の中で、黄金の輝きが見えた気がした……………

……え？　ここ何処？（後書き）

この前は切嗣Sideが多かったので、赤毛の少年の方を書いてみました。

……うん、前より適当になってる気がする。

ヒロイン誰にしようかな――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4628x/>

俺がF a t eの世界に転生するはずがない

2011年10月27日08時12分発行